

主イエスを仰ぎ見るべし

2010.1.19(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

箴言 4章25節から27節

あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ。あなたの足の道筋に心を配り、あなたのすべての道を堅く定めよ。右にも左にもそれではない。あなたの足を悪から遠ざけよ。

ヘブル人への手紙 12章1節から3節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

ある時イエス様の弟子たちはイエス様のところへ行き、お願いしたのです。「主よ。祈ることを教えてください」と。どうしてこのような気持ちになったのか、誰でも分かると思います。イエス様は悩みのお方でした。生きることが楽しくてしかたがない。そのような気持ちは、一秒ももっておられなかったはずです。苦しみのお方でした。しかし何があっても、イエス様はいつもお元気でした。どうしてでしょうか。それは祈られたからです。ですから弟子たちは、「主よ。祈ることを教えてください」と言ったのでしょう。

祈ることとは、主に打ち明けることです。自分の無力さを認めることです。そうするなら、力の源となるのです。祈ることは、もちろん助けを求めることだけではなく、聞く耳をもつということです。このことこそ、大切です。「主よ。語ってください。しもべは聞いております。結果は何でしょうか。即ち、私の思いではなくみこころだけになるように、ということになります。もちろん絶えずこの態度をとったのはイエス様だけです。しかし、自分の思いではなくみこころだけになるようにという態度こそ、まことの礼拝ではないでしょうか。

パウロは、本当に祈りの人でした。彼はある時、次のように言いました。

ローマ人への手紙 8章18節

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

「取るに足りないもの」とは、パウロの場合はどういうものだったでしょう。コリント第二の手紙から二、三節読みます。「大変だ！」としか言えません。

コリント人への手紙・第二 11章23節から28節

彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。

このような箇所を読むと、パウロは大変悩んでいる人だったのではないのでしょうか。だからこそ、彼は祈ることの大切さを強調したのです。このコリント第二の手紙1章8節から、彼はまた書いたのです。

コリント人への手紙・第二 1章8節、9節

兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。

なぜ、主はそれを許されるのでしょうか。どうして私たちは、そんなに悩まなくてはならないのでしょうか。もちろん主は答えられたのです。ですから、パウロは続いて書くことができたのです。

コリント人への手紙・第二 1章9節後半から10節

これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。

『神により頼む者となるためでした。』まだそのようになっていなかったのです。悩んでいるパウロは、いつも元気でした。祈っていたからです。

言うまでもなく初代教会の特徴とは何であったかと言いますと、「待ち望む」、「主の再臨

を待ち望む」ことでした。「もうしばらくすれば来るべき方が来られる。遅くなることはない」とヘブル書に書かれています。「頭を上^{あがな}に上げなさい。贖^{あがな}いが、即ち花婿^{はなむこ}なるイエス様が近づいたのです」と。結局^{しよくきよう}どういう状況^{じよくきよう}に置かれていても、「もうちょっと」と考えるべきなのではないでしょうか。

イエス様を知るようになった人々は、輝^{かがや}かしい、素晴^{すば}らしい将来をもつものです。イエス様は彼らにとって「道」であり、「真理^{しんり}」であり、また「いのち」であるからです。確かにイエス様なしの将来は、真^まつ暗闇^{くらやみ}です。

イエス様を知るようになった者は、本当の意味で悩みながら喜ぶことができます。なぜなら、「確^{かく}信^{しん}」するからです。もうちょっとで、イエス様はおいでになります。「今日かもしれない」。どのような状況に置かれても、どのような問題があっても、私たちは希望をもって将来に向かうことができるのです。しかしそのために必要なことは、目に見える現象^{げんしょう}に惑^{まど}わされずに、イエス様を仰^{あお}ぎ見ることではないでしょうか。

今司会の兄弟がお読みになりました箇所の内容は、主イエス様を仰ぎ見る大切さが強調されています。もちろん救われるためにも必要なことは、それだけなのではないでしょうか。
ヨハネの福音書 6章40節

「事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」

私たちの代わりに十字架の上で犠^{ぎせい}牲^{せい}になられたイエス様を、心の眼^めで見る人は救われます。イエス様を見ることこそが大切なのです。もちろんこの目で見ることではありません。心の目でイエス様を見るのが大切です。

私たちにとって最も大切なことは、「イエス様だけを見る」ことです。私たちは、イエス様の一方^{いっぽう}的な愛、また恵みによって救われました。けれど、救われるために救われたのではありません。一つの目的をもって一つの褒^{ほう}美^びを得るために救われた、とあります。この目的、この褒美は、私たちにとって極^{きわ}めて大切なことです。

聖書全体を見ると、私たちがこの目標、褒美にあずかるための道がその中に教えられていることが分かります。とりわけヘブル書の著^{ちよしや}者は、救われた兄弟姉妹が常に前進すべきことを教え、「何々すべし。何々すべし」と、私たちに前進を要^{よう}求^{きゅう}しているのです。それとともに、ヘブル書の著者は、前進することをすすめているだけでなく、必ず問題が目的に達することを約束しています。その理由は、イエス様ご自身がこの目的に達する道を先に歩まれ、今想像^{そうそう}を絶^{ぜつ}する栄光のうちにおられるからです。

イエス様は、身^みを低くし、私たちのあらゆる悩み苦しみを経験され、ついに勝利を得て今

は父の栄光のうちに引き上げられたお方です。ですから、私たちもそこに^{いた}至ることができるという確信を持つことができるのです。それはもちろんイエス様の恵みです。

へブル人への手紙 6章19節、20節

この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕の内側にはいるのです。イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となりました。

とあります。私たちは、この目的を^{たっせい}達成する^{かくしん}確信をもっているのでしょうか。

ここで一つ注意しなければならないのは、旧約聖書と新約聖書は、私たちがこの目的に達しないかもしれないという悲しい可能性を書いていることです。イエス様を信じ、イエス様の前にへりくだった人、恵みを^こ請うようになった人は、もちろん永遠のいのちをもっています。この永遠のいのちは、^{うしな}失い得ないものです。しかし、この目的を達することができないかもしれない、と聖書ははっきり語っているのです。即ち、私たちが目的に達せず、褒美を^{かのうせい}いただけない可能性があります。私たちの生活は、この意味で失敗しているか、それとも成功しているかのどちらかです。失敗か、成功か、私たちの見ているところによって決まるものです。いったいどこを見るのでしょうか。何に目を^と留めているのでしょうか。

初めに読んでいただきました箇所の中のへブル書12章です。

へブル人への手紙 12章2節前半

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。

意味は、他のものから目をそらしなさい、とあります。

イエス様を見ずに、置かれている^{かんきょう}環境によって支配される可能性が十分あります。ですから、聖書の中で^{あやま}誤っている^{みかた}見方の^{きけんせい}危険性についていろいろなことを^{かた}語っています。

1. 一つは、おそらくみなさんすぐに思い出すでしょう。ルカ伝の9章62節ではないかと思えます。即ち、後ろを^ふ振り返る^{かえ}ことです。

ルカの福音書 9章62節

するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を^{すき}鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

これこそ、イスラエルの民が^{げんじつ}現実に行なったことです。

詩篇 78篇41節

彼らは何り返して、神を試み、イスラエルの聖なる方を痛めた。

とあります。いったいどうしてイスラエルの民はカナンの国に入らずに、^{あらの}荒野で四十年もの間、さまよい続けたのでしょうか。なぜ彼らの間に^{みの}実りがなく、勝利、喜び、安らぎ、賛美、

また感謝がなかったのでしょうか。彼らは、後ろを振り向いたからです。

パウロが、救われた兄弟姉妹に大きな重荷を感じていたのも、この「後ろを振り向く」という点でした。ですからパウロはガラテヤ書を書いたのです。彼らは、救われていたのです。けれど、なかなか成長しませんでした。後ろを振り向き始めてしまったからです。

ユダヤ教の信者たちは、イエス様の恵みにあずかった兄弟姉妹を惑わそうと思ったのです。後ろを振り返るということは、結局世に戻ることもなく、無神論に帰ることもなく、また、イエス様を捨てることでもありません。当時のガラテヤの人々にとって後ろを振り向くとは、冷たい、いのちのない、掟的なユダヤ教に立ち返ること、を意味していたのです。

イエス様の恵みによって救われた彼らは、イエス様の満たしにあずかるために召された者でした。しかしもし冷たいユダヤ教に立ち返ったとしたら、決してこのような満たしにあずからなかったことでしょう。またそれは、決して主のみこころにかなった霊的生活とはならなかったでしょう。というのは、ガラテヤの信者たちは、後ろを振り返り、少しも前進する兆し、様子がなかったのです。その場に立ち止まったままでした。ガラテヤの信者たちが、内面的に前進するか、または霊的に退くかが問題です。

後ろを振り向かず前進すべきことは、パウロの願いであり、パウロの心からの願いであったので、パウロは、ガラテヤ書の中でこの事からについて書いたのです。

しかし、私たちの状態はどうでしょうか。後ろを見ているのでしょうか。後ろを振り向くと疑いが起こり、悪魔が勝利を握ります。後ろを振り向くたびに、イエス様を否認しているのです。ですから、後ろを振り向くこととは、間違った見方です。

2. もう一つの間違った見方とは、不安そうにあたりを見ることです。イザヤ書の41章の10節。素晴らしい言葉が書かれています。

イザヤ書 41章10節

**恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。
わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。**

「不安そうにあたりを見回すなかれ」という言葉は原語にだけあり、日本語の訳では、「驚くなかれ」となっています。「恐れてはならない。恐れるな」。私たちは、なんとしばしば周りを見回すことでしょうか。

福音書を読むと、ペテロについていろいろなことが書いてあります。彼は、不安げにあたりを見た男でした。波の上を歩いていたとき、今まで見ていたイエス様から目を離し、あたりを見たとき、波の中に沈みはじめたことが書かれています。マタイ伝14章の中に、次のように書かれています。

マタイの福音書 14章28節、29節

すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。

泳いだのではないのです。ちゃんと水の上を歩いたのです。できました！何メートルだったか、何十メートルだったか分かりませんが、確かにペテロは水の上を歩いたのです。
マタイの福音書 14章29節後半から31節

そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」

「ところが」、問題はそれなのです。風を見て、怖くなり、・・・叫び出し、「主よ。助けてください」と言った。イエス様は恵み深いお方ですから、すぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われました。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか」と。

今、話しましたイスラエルの民も、同じく不安げにあたりを見回したのです。十二人の使いが、カナンの地をのぞき見て、そのうちの十人は不安げにあたりを見回し、カナンの地の堅い要塞と内に住む巨人たちだけを見て恐れたのに対して、残りの二人は、ただ主を見上げカナンの地に入ったことは、旧約聖書を見て明らかです。イスラエルの民は、恐れおののいた十人に従ったのです。結果として約束された地に入ることができませんでした。カナンの地に入ったのは、先の二人だけでした。

不安げにあたりを見回してはいけません。主は私たちをお救いになりました。その主が、救われて以来私たちを導いていてくださいました。困難や苦しみは確かにあります。けれど困難や苦しみに縛られ、主に従うことができなくなるというようなことにならないように。

ですから箴言の4章の中に、
箴言 4章25節

あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ。

と書かれています。即ち、不安げにあたりを見回すなかれ、と。

3. 三つめの間違った見方とは、近視的にもものを見ることです。

パウロは、なかなか前進しなかったコリントにいる兄弟姉妹に書いたのです。
コリント人への手紙・第二 10章7節前半

あなたがたは、うわべのことだけを見ています。

パウロにとって悩みの種でした。「あなたがたは、うわべのことだけを見ています」。

これは危険な誤った見方の一つです。私たちは時々、私たちの現在直面している悩みだけを見てしまいます。私たちの直面しているそのものだけが、私たちに影響を及ぼします。もし、私たちが周りの問題だけを近視眼的に見るなら、決して主のご目的に到達することができません。このような限られた視野を持つことは、主のご栄光を奪う結果となります。私たちは、目の前のものを見て、すっかり混乱してしまいます。「もう駄目だ」と考えてしまいます。

この近視眼的見方は、私たちの大きな悩みなのではないでしょうか。私たちは未解決の苦しみや問題だけを見つめます。苦しみや問題は確かにありますが、だからと言ってそれで終わりなのではありません。周りにあるそれらの問題は、私たちが妨げるものであり、また、ヘブル書12章1節の「いっさいの重荷とまつわりつく罪」を意味しているのです。

こんにちある問題は、重荷のように私たちの上にのしかかり、私たちは「もう駄目だ」と思っているかもしれません。これこそ私たちにまつわりついている罪です。

近視眼的な見方は危険です。悩みです。妨げとなるのです。「あなたの目はあなたの前をまっすぐに見よ」。主イエスから目を離さないでいなさい。

今の悩みは重要な事からではありません。目に見えない霊的な現実が、目に見える事からより、私たちにとって現実的な問題とならなければいけないと思います。困難に閉じ込められてしまっただけではいけません。困難は決して尽きることがありません。私たちの腹痛のような問題は、たいした問題ではありません。イエス様の「み苦しき」が、最大の問題です。

ペテロは、当時のいろいろなことで悩んでいる兄弟姉妹を励ますために書いたのです。
ペテロの手紙・第一 4章12節、13節

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。

4. もう一つの間違った見方は、自分勝手なもの見方です。

パウロは次のように書いたのです。ローマの刑務所の中からです。
ピリピ人への手紙 2章4節

自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。

自分のことのみを顧みることは、まことに自分勝手なことです。イエス様を信じる者として利己的生活をすることは赦されません。私たちはイエス様の肢体として、イエス様から目をそらしている兄弟、また、罪に沈んでいる姉妹に対する責任を持っています。

「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい」。これは、何を意味しているので

しょうか。何か一つの問題がある場合、それは私にどんな影響があるかと考える必要はありません。人にはもし事が起こった場合、自分に害が及ばなければそれで良いとする考えが往々にしてあるでしょう。

もし集会の兄弟姉妹が悩みにあっており、或いは意識してイエス様に不従順であり、また、イエス様から目をそらし他のものを見ているとしたら、私たちが無関心でいることが果たしてできるのでしょうか。

自分のことだけを顧みてはいけません。自分のことのみを顧み、自分にだけ意を用いる考え方は、誤ったものの見方です。自分自身を顧みることは、自分を不幸にする一番の早道なのではないでしょうか。

5. もう一つの間違った見方は、自己分析することです。

パウロは、書簡をもってこのようなことを行なわないようにと警告を与えています。自分の内に目を留めることの結果は、霊的な停滞をきたします。

なぜ、私たちは自分の内を見つめるのでしょうか。自分のうちにイエス様を満足させるものがあると考えているためでしょうか。自分を見ることによって、自分を喜ばせたいと思っているのでしょうか。これは誤った見方の一つです。自分自身を見つめると不幸になり、また、絶望する結果となります。私たちのうちには、何の良いところもありません。これは、知る必要があります。私たちの内に良きことを期待することを止めましょう。ですからソロモンは、「あなたの目は、あなたの前をまっすぐに見よ」。イエス様から目を離さないでいなさい、と。

今まで、誤った見方の危険性について考えました。今度は、逆のことを考えましょう。即ち、イエス様を見る祝福について、少しだけ考えたいと思います。

私たちの見るところは、今話しましたように非常に大切です。ヘブル書の著者は、ヘブル書を通して、救われた人々の特権に目を留めることを教えてきて、最後にこの12章2節にまとめて書いたのです。

ヘブル人への手紙 12章2節

イエスから目を離さないでいなさい。

「イエス様から目を離さないでいなさい」という言葉の原語を見ると、今話しましたように、「他のものから目をそらし、主イエスだけを見よ」という意味が含まれていますが、過ぎ去ったすべての事がらを振り返らず、私たちを取り巻いている事がらに目を奪われず、あらゆる自分にかかわる問題に心を奪われず、目前にある悩みに目をくれず、また、自分自身を見つめず、ただイエス様を見よ、と。

私たちの見るところは、非常に大切な働きをします。私たちの目は、あれこれを見ます。私たちの目は、ここあそこで満足を追い求めますが、聖書は語っています。「あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ」と

私たちは、目的をどこに置いているのでしょうか。私たちの目は、どこに向けられているのでしょうか。天的なものに目が向けられているのでしょうか。それとも、地的なものに、この世的なものに、目が向けられているのでしょうか。

もし、私たちの目が、天的なものに向けられているならば、それは信仰の前進の原動力となることです。靈的成長の秘訣は、天に眼を向けることです。

箴言 4章25節

あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ。

この言葉はどのような意味を持っているのでしょうか。主のみこころが、主の目的が何であるかを、みことばと御霊によって教えていただきたいものです。主のみこころそのものを教えていただきたいものです。全生涯を、主のみこころと目的にかなうようにしていただきたいものです。

イエス様を仰ぎ見る者は、主のご目的を見ることができます。もし私たちが、主の目的ではなく、自分の目的を目の前に置くならば、私たちの生涯は失敗に帰し、主の目的を達することができず、褒美にあずかることもできないのです。

主のご目的は、目に見えるものではなく永遠のものです。ですからパウロは、コリントにいる兄弟姉妹に書いたのです。これもよく引用される大切な箇所です。コリント第二の手紙4章17節、18節です。

コリント人への手紙・第二 4章17節、18節

**今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めま
す。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。**

「今の時の軽い患難は・・・」、パウロは「軽い」という言葉を使ったのです。

私たちは、永遠に連なるものを見ているのでしょうか。私たちの生涯は、主のご目的にかなっているのでしょうか。

悪魔は、私たちが主のご目的を達成しないように、また、私たちが地的なもので縛られているように、また私たちが世的な目的を追い求めるようにと、あらゆる画策をしています。悪魔は、しばしば私たちを目的からはずれた興味をもって、麻痺した状態に陥れることは、経験することです。私たちの生涯が、主のご目的とみこころに全く合致するように祈り求めたいものです。

私たちは今、対人関係に縛られ、自分でどうしたら良いか分からないでいるかもしれません。主のご目的を考え、イエス様を仰ぎ見ましょう。もし、私たちが悩んでいる対人関係が主のご目的を達成することを妨げているなら、その関係を速やかに断ち切らなければいけません。私たちは、次に訪れる未来の出来事がいかなるものであるか、全く見当がつかない

かもしれません。主のご目的を深く考え、イエス様を高く高く見上げようではないでしょうか。将来どこでどのように働いて、また奉仕したら良いか見当がつかないかもしれません。そのような時も、主を仰ぎ見ようではないでしょうか。

「あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ」。このみことばの意味は、「あなたの全生涯をすべて、我が心に合わせよ」という主のみことばを意味しているのです。どうしたら良いか分からないような悩みを持っているかもしれません。しかし、この問題を解決する時、まずどうしたら主のみこころにかなない、主のみこころを全うすることができるかをよく考えてください。自分の悩みではなく、主のご目的を見つめましょう。あらゆる悩み、困難、苦しみを貫き通して、主を仰ぎ見てください。私たちの全生涯を、全く一貫したものとさせていただきたいものです。

主のご目的は何であるかを知っているのでしょうか。主のからだなる教会が、父なる神にとっていかに大切なものであるか、私たちは知り得たのでしょうか。花婿なるイエス様が、どんなに花嫁である教会を愛し、恋慕しておられることが知っているのでしょうか。

悩みは確かにあります。未解決の問題は山積しています。困難は続いています。また悪魔は、「お前の目指す目的は高すぎる。これで満足せよ」とささやくでしょう。私たちは、それをもって満足してよいものなのでしょうか。これをもって満足しているなら、災いなことです。

主のみこころはいかなるものなのでしょうか。パウロは、エペソ書3章10節、11節に次のように書いたのです。

エペソ人への手紙 3章10節、11節

これは、今、天にある支配と權威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、私たちの主キリスト・イエスにおいて実現された神の永遠のご計画に沿ったことです。

「これは、今、半年後ではないのです。

イエス様を仰ぎ見るべきです。他のものから目をそらし、イエス様だけを見ましょう。

悪魔は、イエス様にこの世のすべての富を示しただけではなく、提供したのです。しかし、イエス様はそれを断固として退け、父なる神のご目的に目を止め、ひたすらに前進されたのではないのでしょうか。悪魔は、イエス様が十字架にかかることがないようにするため、この世のいっさいのものをイエス様に提供しました。けれど、イエス様の眼は、ひたすらにただ前を見つめておられたのです。ヘブル書の著者は書いたのです。

ヘブル人への手紙 12章1節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前

に置かれている^{きょうそう}競走を^{じんたい}忍耐をもって走り続けようではありませんか。

走ることは、イエス様だけを仰ぎ見ることです。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」。他のものから目をそらしなさい。

ダビデは、いったいどうして、「みこころにかなう人」と呼ばれたのでしょうか。詩篇の16篇を見るとその答えが出てきます。

詩篇16篇を最後に読んで終わります。

詩篇 16篇8節、9節

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは^{やす}楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。

了